

英文学研究と言語意識

宇佐見 太 市

(関西大学)

(一)

イギリスの作家チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-1870) は、1842年1月から約半年間アメリカ旅行に出かけ、その見聞録 *American Notes* を1842年10月に2巻本にまとめて刊行した。

30歳の若きディケンズがアメリカ体験から何を得たのか。これに関しては川澄英男の『ディケンズとアメリカ—十九世紀アメリカ事情』(彩流社、1998年)が大変詳しい。特に第5章で川澄は、ディケンズのアメリカへの旅は自分自身への旅、すなわち自己発見の旅であり、ディケンズはイギリスの古き良き伝統を再認識したのだと述べ、このアメリカ訪問がその後の作家としての成長に大きく寄与したであろうと断を下す。ディケンズ文学研究の観点からだけでなく、英語教育における異文化理解の点からも、『ディケンズとアメリカ—十九世紀アメリカ事情』は一読の価値があるだろう。

ところで、ディケンズのこの *American Notes* には、文化的側面からの記述だけでなく、かの地でディケンズが実際に耳目に触れ、そのつど尋常ならざる関心を抱いたイギリス英語とアメリカ英語の相違が詳述されている。言葉の魔術師ディケンズがアメリカ英語に大いに食指が動いたであろうことは全く想像に難くはない。たとえば“fix”の語法に関してディケンズは、友人のジョン・フォースター (John Forster, 1812-1876) に宛てた手紙の中でも、*American Notes* に記したのと同様のものを繰り返し綴っている。よほど印象深かったに相違ない。

(二)

アメリカ英語の口語用法“fix”についての記述は、*American Notes* の特に第9章から第10章にかけてなされている。

第10章でディケンズは、この“fix”という言葉ほどアメリカで重宝される言葉はなく、これはアメリカの語彙の中の“the Caleb Quotem”(「なんでも屋」)だと言う。具体的には、外出前の「支度中」(“fixing oneself”)や、「食卓を準備中」(“fixing the tables”)や、荷物を「まとめる」(“fix”)や、医者が患者を「治療する」(“fix”)や、ワインが「飲み頃」(“fixed properly”)や、生焼けではなくてきちんと「調理された食べ物」(“fixing God A’mighty’s vittles”)や、乗客同士でうまく席を「つくる」(“fix”)といった用例を出している。これらの言葉に触れた際のディケンズのはしゃぎぶりは、フォースターに宛てた手紙からも窺い知れる。私には何とも微笑ましく思われる。

第9章では、イギリス人が“All right!”と叫ぶようなとき、アメリカ人は“Go ahead!”

と叫ぶのだと言い、これは国民性の違いを表していると言われているとディケンズは推し量る。

第8章では、「ズボン」を意味する“pants”という語彙をディケンズは上述の“fixed”と共に出している (...pants are fixed to orde....)。そしてその“fix”は、この章の別の箇所でも登場する (... “to fix” the President)。

第2章には、“right away”と“directly”が同じ意味だとわかって驚愕するディケンズの姿が克明に描かれている。ディナーをめぐってホテルの給仕とディケンズは言葉を交わす。ディケンズがディナーをできるだけ早くもってきてくれ (“as quick as possible”) と給仕に頼んだのに対して、給仕は“Right away?”と念を押す。ところがディケンズはこの意味がわからず、“No.”と答えてしまう。それを聞いた給仕はわけがわからなくなり、困惑する。別の人物の手助けもあり、やがて誤解は解け、“right away”が実は“directly”(「今すぐに、ただちに」)のことだとディケンズは知る。ディケンズにとっての“right away”はあくまで「別の場所での食事」の意味だったのである。

(三)

ディケンズの言語意識の鋭さに初めて私が気づいたのは彼の後期の作品『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1861)を読んだときである。ランプの絵札を“Knave”ではなく“Jack”と呼ぶ習わしの労働者階級の主人公ピップ(Pip)に対して、上流階級のエステラ(Estella)が軽侮の念を抱く場面である。

さらにまた、作家の業と言ってしまえばそれまでだが、ディケンズの己がテキストへの拘りぶりにも深い感銘を受けた。一例が最終場面の本文改訂である。小説の文字通り最後の表現において、1861年版のテキストでは“...I saw the shadow of no parting from her.”であったのだが、1868年版でディケンズは“...I saw no shadow of another parting from her.”と書き直している。エステラとの別離が過去に一度あったので作者としては論理の上から“another”を挿入したいと思ったであろうことは推測されるが、熟考を重ねつつ一字一句にこだわり作品と真摯に向き合うディケンズの作家魂に、私は「文学」のあるべき姿を見た思いがした。私たちは一読者としてテキストを読解していく立場だが、書く段になればこちらとて、真剣に言葉を紡いでゆかねばならぬとしみじみ思った。

ディケンズにまつわる思い出話はさておき、文学テキストとの対峙からやがて文化としての言語と格闘しながら後世に残る素晴らしい仕事を成し遂げた人に江藤淳がいる。アメリカ文学研究者の異孝之が江藤淳の原点は「英文学者」だと喝破している通り、英文学研究の心を忘れぬまま、文芸評論家として一家を成した人物である。慶應義塾の学生時代に徹底した本文校訂の意義と手法を体得した江藤淳は、その後、『閉ざされた言語空間—占領軍の検閲と戦後日本』(文藝春秋、1989年)を世に問うことになる(初出は月刊雑誌『諸君!』1982年2月号で、通算六回、同雑誌に連載している)。

GHQによって日本の歴史や文化はいかにアメリカに都合のいいものにとって替えられたかを、検閲文書を解読することによって江藤淳はみごとに解明したのである。この著書は、9ヶ月間ウィルソン研究所で行った検閲研究の集大成だ。江藤淳がここで力説しているのは、GHQによる検閲の影響は決して過去のものではなく、実は今なお日本人の思考形態にとって足枷となっているという指摘である。この本はもちろん江藤淳というひとりの天才が生み出したものではあるが、慶應義塾の英文科の学統ともいべき緻密なテキスト読解の研究手法がDNAとして彼の身中にきちんと受け継がれていたであろうことを忘

れてはならないだろう。日本の英文学研究界の低迷ぶりが囁かれて久しいが、今こそ、江藤淳が成した業績に思いを馳せるべきである。

(四)

私は昨年、英文学系の学会の講演で、「現在の英文学を総合人間学のような領域に思い切ってシフトさせたらどうだろうか。言葉だけでなく、言葉によって伝えられる情報や意味を前面に押し出したらいい。言葉を発している人間に興味を持ち、その人間が創出した文学世界を通して人間教育に向かうのが良いだろう」といった趣旨の話をした。それが英文学研究界の生き延びる道だと信じたからである。ただその際、何度も強調したのは、英語であれ日本語であれ、やはり研究姿勢の基本は言葉にこだわるという点だ。これを怠ってはいけない。私ども英文学徒が死守すべき最後の砦である。

手元に昭和42年(1967年)の比較文学者太田三郎の随筆「女子学生の卒業論文」(『群像』三月特大号)がある。太田は、日本文学専攻学生の論文は文藝時評風の読後感的なものに陥りがちだが、外国文学専攻の学生の場合は理論的分析的な批評になりがちだと言う。これは40年も前の一例だが、案外今も変わってはいないだろう。日本文学とは違って、言語・文化両面において初めから距離がある外国文学研究は、不即不離の立場を取り、言語分析から入って行かざるをえないのは自明の理である。そしてこれが実は私たちの武器にもなりうるのだ。緻密な言語分析は遠く離れた場所にいる者に許された強みでもある。

本場英米の英文学研究の先細り現象を嘆くジョージ・スタイナー (George Steiner) のメッセージが現在の日本の英文学徒にとってカンフル剤となるだろう。スタイナーはカフカ (Kafka) からの引用を使い、「本」を読むことの大切さを説いている。英文学の本場である英米の大学英文科においてさえ、活性化のためには今やひたすら本を読むことが必須だとスタイナーは説く (A book must be an ice-axe to break the sea frozen inside us.) (George Steiner, *Language and Silence*, Faber & Faber, 1967)。

英語圏から遠く離れた日本で英文学研究に勤しむ者の務めは、先達の優れた知見に謙虚に耳を傾け、言語意識をさらにいっそう磨くことではあるまいか。